

母乳育児を介する親子の絆の持つ意味

吉 永 宗 義 (日本赤十字九州国際看護大学看護学部)

I. はじめに

日本における母乳育児の現状は徐々にではあるが着実に改善している。1か月時での完全母乳育児率は昭和55年の乳幼児栄養調査から40%台を超えることなく、平成17年度では42.4%であったが、平成22年度では51.6%となり3か月時点でも50%以上が維持されている¹⁾。さらに厚生労働省は平成26年度に向けて60%まで改善するような数値目標もあげている。また、平成19年に厚生労働省が作成した「授乳・離乳の支援ガイド」²⁾の基本的な考え方には、「健やかな母子・親子関係の形成を促す」ことが述べられており、授乳を通して赤ちゃんの心と体を育むことを促している。母乳育児支援にかかわる者は、母乳育児率を上げることが最終的な目的ではなく、その結果もたらされる心身の健康も目指しているが、新生児死亡率が世界でトップクラスになった日本では身体的な健康問題もさることながら、支援ガイドにあるように母子・親子関係の形成を促すことが望まれている。つまり母乳育児を医療の側面から見るのではなく、一人の人間を育てる視点、すなわち日常の営みとしての視点からとらえることが必要とされている。

山内逸郎は新生児医療の領域では、経皮酸素分圧モニターの臨床への導入や経皮ビリルビンメーターの作成による less invasive care に貢献したが、生涯の取り組みとして母乳育児支援が知られ、母乳育児を“生物学的当為”であるといい、ヒトが人間になるための基本的な信頼関係を形成すると述べている³⁾。この意味を小児保健に携わる者は理解しなければならない。

II. 母乳育児の現状

WHO/UNICEF は1989年に「母乳育児成功のための10カ条」を提唱し、世界のすべての分娩施設がこの10カ条を遵守することを要請した⁴⁾。最初の1, 2, 3条は母乳育児の教育に関する条項であり、事業を始めるにあたり組織としての意思統一と、対象に理解させることを求めている。同時に、施設の現場で母乳育児を支援する具体的方法として、第7条に終日赤ちゃんとお母さんが一緒にいるようにすること、第8条に赤ちゃんが欲しがるときにはいつでも授乳をさせられるようにすることを求めている。この10カ条が制定される背景には、世界的な運動戦略の目的として、乳児の生存率の改善をあげるために、生後6か月間は完全に母乳だけで育てられることがあげられる。

日本においては、2011年の日本小児科学会雑誌に、「小児科医と母乳育児推進」という特集が組まれている⁵⁾。この論文には母乳育児支援、それから、母子の健康と母乳育児、あるいは母乳育児を行えない理由と対応というような言葉が入ってきているように、母乳育児の「支援」という考え方が明確に打ち出されている。

また前述したように、「健やか親子21」のそれまでの取り組みを踏まえ、平成26年度に向けて生後1か月児の母乳育児率を現状の43.8%から60%まで引き上げるという数値目標が設定された。60%というのは、過半数であり母乳育児をやっている人たちが標準の育児方法であることを示すということになる。

ところが、母乳育児率は、地域によってはいまだに低いところがある。その理由にはいろいろあるが、一

つには現代のお母さんたちの母乳育児に対して抱えている不安があげられる。家族の形態として核家族化が進んできており、家庭内での育児を支援する家族も少なく、支援が期待できる祖父母との意見の対立もある。また父親にしても、十分な育児休業をとることや育児支援をできずにいる。このような家庭環境にある母子を、医療者が育児支援のプロとしてどのように支援していくかということが重要である。その支援の一環として、「母乳育児成功のための10カ条」を遵守することが求められているのである。しかし、医療施設側にも、産科医や分娩施設が減少し医療が集約化されて、在院日数も短くなり、医療を効率化するということが求められるようになった。本来事業というものは、効率性と、有効性というもののバランスによって運営されており、効率を目指せば財政的基盤がしっかりするが、本質的に大切なものすなわち有効性を見失う可能性がある。有効性ばかりを追い求めていると経営ができない。病院運営（経営）も同様である。また、医療現場で求められる問題に安全性があげられる。育児、あるいは分娩というのは、本来自然の営みとして行われるものであって、医療が介入するものではなかったが、多くの分娩とそれに引き続く最初の育児支援を医療機関で扱う以上、安全性を担保することが求められている。そのために過剰な医療介入も容認される傾向がみられる。しかし、安全という名目のもとで自然の営みが阻害されることがないように配慮しなければならない。

「母乳育児成功のための10カ条」を遵守している施設は、赤ちゃんにやさしい病院（Baby Friendly Hospital, BFH）の認定を受けているが、BFHの認定を受けている病院が多い地域では母乳育児率が高いこともわかっている。BFHの施設だけで地域全体の母乳育児率が高くなるわけではなく、その施設を中心として地域の分娩施設が母乳育児を推進する意識を持っていると考える。これは、分娩施設の母乳育児支援への取り組みの在り様が影響することを示しており、医療者の責任の大きさを意味している。

Ⅲ. 母乳育児をすすめる活動の意味とは

乳幼児死亡率が世界でトップクラスの本邦において、なぜ母乳育児をすすめるなければならないのであろうか。医療者に限らず多くの母親は栄養学的な面、疾病予防の面、健康の面など多くの面で母乳が優れてい

ることを知っている。また、母子関係や子どもの発達、虐待の予防などの面でも好影響がある。しかし、母乳で育てるのは哺乳動物として当然のことだからといって、当然できるはずの母乳育児ができないと敗北感につながると言われる。母乳で育てると母子愛着が確立するというと、母乳で育てないと母子愛着はできないのか、ミルクでも十分できるではないかという反論も受ける。それ以外でも母乳育児のメリットに対して、個別例を取り出してよく反論される。このように母乳の良し悪しで母乳育児の意義を伝えても十分とはいえない。しかし母乳育児の推進に対して否定的意見を聞くことはない。

経営の戦略論にはM (Mission), O (Objectives), G (Goal), S (Strategy), T (Tactics) という段階がある⁶⁾。この戦略論は経営だけでなく、いろいろな事業にも適用できる。そこで、母乳育児支援活動に当てはめてみると、WHO/UNICEFは、乳児死亡率を改善するという目標 (Objectives) を達成するには母乳栄養率を上げればうまくいくという目的 (Goal) を設定し、その母乳栄養率を上げるためのBFHを認定するという戦略 (Strategy) をたて、そのBFHを認定するための戦術 (Tactics) として、10カ条を制定したと私は考えている。ではMissionは何であろうか。今WHO/UNICEFのMissionは措く。乳児死亡率が世界でトップとなった日本における母乳育児のMissionを考えると、私は「人を育てる」ことであると考えている。「人を育てる」、すなわち育児の目的には、発育を促す、疾病を予防する、そして社会生活を行うためのしつけや教育を行うことがあり、さらに人を愛することを教えることが重要である。

これらの育児の目的を達成するには、まず人という存在の特徴を知る必要がある。ヒト (ホモ・サピエンス) は二足直立歩行をし、道具、言葉を使う。そして家族を形成する。家族という単位を構成する条件として、①永続的なオスとメスのつながり、②配偶者間に経済的分業が存在すること、③インセスタブー (近親相姦がタブー) になっていること、④外婚制 (エクソガミー) が存在すること、⑤近隣関係を持つことなどがあげられる⁷⁾が、これらの条件を満たす動物は人間しかいない。

Ⅳ. 家族の形成にかかわる母乳育児

L・マルグリスが『ミクロコスモス』の中で進化に

における共生説を紹介している⁸⁾。地球の歴史というのは、約46億年で、生命が誕生したのは約30数億年前である。この間地球上において共生するという事は進化をするうえでの戦略であり、地球上のすべての生命が、地球そのもの（地球も大きな意味での生命体）と共生しているといっても過言ではない。しかし、人間におけるその基盤となるものは、家族の中でともに生きることである。この家族はどのようにして形成されるにいたったのであろうか。

進化の過程ですべての種は子孫を残すための戦略をとってきた。性というものも発展した。その結果哺乳動物というのは、子宮の中で確実に子どもを成育させて、それから乳汁による養育をした。乳汁が必要とされる理由として、恒温動物として哺乳動物は体温を高め設定しているが、そのためには水分が必要であることがあげられる。また、老廃物を尿素として尿中に出していくという戦略をとったために、乳汁によって十分な水分を与えて子どもたちを育てなければならなくなったのであろう。

さらに、人類の祖先であるサルは、恐竜が絶滅した後、熱帯のジャングルの木の上で生活するようになった。霊長類学者の河合は『森林がサルを生んだ』の中で、熱帯のジャングルの木の上というのは、猛獣によって襲われず食べ物が豊富にあるために、個体数が爆発的に増えていく危険性があったため、人口抑制の戦略ということをしなくてはならなくなったと述べている⁹⁾。そのために、1回の妊娠で一人しか子どもを産まなくし、妊娠期間を長くした。ヒトでは子宮内の脳の発育が身体発育より大きく、経膈分娩を可能とするには脳が過大にならないように未熟な状態で子どもを産むことになり、生まれた子どもは母親に依存しなければ生存できない。成長させるための授乳期間は長くなり、その結果泌乳を維持するためのプロラクチンは分泌され続けることによって、排卵の抑制すなわち次の妊娠の機会が減少して人口増加が抑制される。結果的に一人の子どもに対して長い育児期間が与えられることになる。この間授乳をする度に子どもを抱くことになる。母子間の基本的信頼関係はこの過程で形成される。

子どもの哲学の根本問題は、「存在」だと永井が述べている¹⁰⁾。存在を自覚することは、一人ではできない。他者の他者としての存在を自覚する必要がある。すなわち他者とのコミュニケーションによって存在

を自覚する。人間のコミュニケーションの特徴は、対面的なコミュニケーション、見つめ合いである。チンパンジーでは母子間の相互交渉があり、見つめ合いによって形成された自己と他者の関係である二項関係の中で認知的に成長するが、自己、他者、物という三項関係はみられないと報告されている¹¹⁾。一方、人は、見つめる、微笑むという、母子関係の中で二項関係が成立し、赤ちゃん自身も母親に働きかけて指さしなどを通して三項関係を積極的に構築しようとし、母親も言葉かけによって言語の獲得にさまざまな手がかりを与える。このような三項関係というのができていくというのは人だけである。

このようにして母子間の基本的な信頼関係によるコミュニケーションを発達させ、その結果、母子関係を基盤とした家族というものもでき上がる。ゴリラの研究で有名な霊長類学者の山極が「家族進化論」の中で、「自己犠牲を行うことによって自分が死んだとしても子孫を増やすことにつながる。自分の命を犠牲にしてでも自分の子どものために一生懸命働くということを親はやっていく。さらに、仲間に対する共感、これはコミュニケーションによってつくることができる。そして、仲間への奉仕をし、道徳や良心というものができ上がってくる、これが人間社会の特徴だ」と述べている¹²⁾。山極は、この共感を生み出す重要な因子として、人間の脳内にみられるミラーニューロンの存在を指摘している。ミラーニューロンは高等な霊長類にみられ、他者と同調して反応することが知られている¹³⁾。

人間ほど子どもを育て終わってからも長く生きる動物というのはいない。それは子どもたちがたくさんなってくると、親だけではそれを支えきれず、ましてや母親だけでは支えきれない。まずは、父親の育児参加が必要となる。その父親が子育てに参入することによって、母子だけの向社会的な行動というのが、オスと子どもたち、そして年長の子どもたちの遊びの中で拡大していき、結果として共感と同情を抱く機会が増大することになる。しかし父親というのは、それなりの資格が必要である。①単位集団に所属する雄で、②単位集団の防衛にあたる、③単位集団の生活の維持のための経済的活動をする、④そして、そこにいる子どもが自分の子どもであることを認識して子育てに参加する。特に④の資質はゴリラや人間だけにみられ、家族の形成に重要な要素である。

今、コミュニケーションが変容してきて、上に述べたような家族というものが維持できなくなりつつあるという問題が出てきている。ソーシャルネットワークシステムが進歩して何千キロも離れた人たちとコミュニケーションがとれるようになってきた。これは、それなりに拡がりがあるという意味ではいいのかもしれない。しかし、家族という共感にあふれる人々の輪の中で育ち、見返りを求めず、自分の成長のために大きな犠牲を払って、尽くしてくれた人々の存在がないところで生きていかなければならなくなる。

さらに今後の人類の未来について考えてみると、レイ・カーツワイルは『ポスト・ヒューマン誕生』の中で、近い未来にテクノロジーと人間の機能が融合する時期に入って、その結果宇宙が覚醒すると言っている¹⁴⁾。彼によれば、進化のような歴史的な成長曲線は指数関数的曲線であって、特異点を過ぎると爆発的に成長するようになっていく。地球はずっと進化してきて、ある特異点のところには差しかかりつつあり、2040年以降になってくると、人間の脳全てよりも計算できるようなコンピューターができてくるだろうと予想している。これを「コンピューター 2045年問題」といい、コンピューターが人類を超える日である。そこまでは人間はそのまま存続して、コンピューターが人間の機能を増強するネット社会として存続するかもしれない。ネット社会というのは、視覚と聴覚が重要で、触覚は要らない時代である。しかし、知的能力のみでの判断は間違いが起りやすく、発想も乏しくなる。それに対して触覚のように全身で感じることによる判断は確実である。人が生存し続けるためには手で触れる感覚や、体を動かすことによって作り出されるコミュニケーション感覚(調和)が必要である。もし、コンピューター社会によってこのような感覚が失われれば家庭内の調和(家族の信頼関係)も失われる。

鷺田は『「待つ」ということ』の中で、「育児というのは、ひたすら待たずに待つこと、そして、待っているということも忘れて待つこと、いつかわかってくれるということも願わずに待つこと、いつか待たれていたと気づかれることも期待せずに待つこと…という“待たずに待つ”という営みなのかもしれない」と言っている¹⁵⁾。これが究極の「待つ」である。看護師は「傾聴する」という言葉をよく使うが、聴くためにはジッと「待つ」ことが求められる、そうすると患者は自分の居場所を見つけ、自分でポツポツと話し始め

る。その結果、自分の心の中にあるものを自覚するようになる。鷺田は同時に、「家族というものがときに身を無防備にさらしたまま寄りかかれる存在であるとしたら、この、期待というもののかけらすらなくなっても、それでも自分が待たれているという感覚に根を張っているからかもしれない。人は、待たれることが自分の存在の最後の支えの一つになり得ることを知っている」とも述べている。すなわち、自分を絶対的に受け入れてくれる人がそこに存在することによって、それを最後のよりどころとして人間は生きていくことができる。

先に母乳育児の Mission は「人を育てることだ」と述べたが、母親が母親となり、赤ん坊がヒトという哺乳動物から人という社会的存在となるように、見守り、育てることだと考える。今まで多くの医療関係者は、「母乳栄養」という言葉から「母乳育児」、そして「育児を考えて支援しましょう」というように言ってきた。しかし、まずは「育児」である。子どもをどう育てるかが最も根源的な問題である。そのような視点から母乳育児を見ていくと、母乳がいいから、母乳を飲ませていると母子関係が確立するからということではなくて、共感を持つことができる子どもを育てていくためには、母乳育児が必要だということに気づく。

V. 母乳育児の意義

河合は『子どもと自然』という著書の中で“内なる自然”という言葉を使っている⁷⁾。“内なる自然”とは、「進化史を通じて、人類の存在の根本を形成している諸形質のことをいい、系統発生的適応を通じて人間の心性の奥深くに形成されているものである」と述べている。この“内なる自然”というものが荒廃したら人間は人間としての存在を失うことになる。“内なる自然”こそ人間の人間たる根源的な形質であろう。生命学者の中村は、母乳育児シンポジウムの特別講演「“生きている”を見つめ“生きる”を考える」の中で、「生きものが続くために、「早い」、「手抜き」はできない。機械の世界は効率よさが重要だけれども、生き物の世界は、プロセスが大事である。今の生き物は、全てゴキブリから何から全て38億年の歴史を持っている。便利さの反対側で壊されていくものが、今、この社会の中にある。外の自然が壊れれば、心という体の中の自然、すなわち、“内なる自然”も壊れていく。母乳の大事なところは赤ちゃんを抱っこして、ゆっくり飲ま

せる以外ないというところである。そうすると本当の意味の愛 (philo) が生まれてくる」と述べている¹⁶⁾。

さて、もう一度最初に戻って考える。私は母乳育児の向かうところは、コミュニケーションを通して“内なる自然”を醸成することだと考えている。体の成長としての栄養や、心の成長のためだけではなく、母乳育児が持っている「人間社会を守っていくことができる人を育てる」という有効性を忘れてはならない。

抱くという言葉は、「手」偏に「包む」と書く。「包む」は、子宮の中に胎児がいるということである。子宮の中にいる子ども(胎児)は、暗くて静かなところで、温かい羊水というお湯につかって子宮からやさしく包まれて心地よく過ごしている。生まれた後は、腕によって(手偏の示す意味)包まれ、抱かれることによってその心地よさを感じる。母乳育児をすることは、一日に何度も抱くことを繰り返すことになり、その度に赤ちゃんに心地よさを与えて、お母さんが赤ちゃんを大切に思っていることを頻回に伝えることになる。この時に、対面的コミュニケーションが構築され、山内が言っていた人間になるための基本的信頼関係が構築されるのであろう。そして、これが“内なる自然”の根源的なものであると考える。したがって、母乳を与えながらテレビを見たり、スマートフォンを扱っているのは育児をしている姿ではない。残念ながら母乳分泌が少なく、ミルクを哺乳瓶で与えていても、愛情をこめて赤ちゃんの目を見て声をかけながら栄養していれば、立派な子育てである。母乳育児率が高いだけの病院が“赤ちゃんにやさしい病院 (BFH)”として認定されるのではない。母乳育児がスムーズに行えるように支援するだけでなく、母乳育児がうまくいかない人をどう支援するかということが求められている。

詩人谷川俊太郎の言葉に、「初め私は母親のからだの中にいた。私のからだも母親のからだは溶け合っていた。その快さはおそらく今も消えることのない意識下の記憶として、私のうちに残っている。私は母親のからだから出て、私自身のからだをもったが、そのからだはともすると、母親のからだの中へ帰りがった」という文章がある¹⁷⁾。抱かれるという意味が伝わってくるように思われる。鷺田が言っていた、「自分を絶対的に受け入れてくれる人がそこに存在することによって、子どもたちというものが生きていける」ということは、抱かれることによって実現できるように思う。そして地球上での進化の結果、必然的に何度も何

度も抱きながら母乳育児を行っている人間だからこそ、“内なる自然”を持ち続けることになると思う。

文 献

- 1) 平成22年乳幼児身体発育調査報告書. <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001t3so-att/2r9852000001t7dg.pdf> (参照2014-10-31)
- 2) 授乳・離乳の支援ガイド. <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/03/s0314-17.html> (参照2014-10-31)
- 3) 山内逸郎. 新生児. 東京: 岩波新書, 1986.
- 4) WHO/ユニセフ. 母乳育児成功のために. 東京: 日本母乳の会運営委員会, 1999.
- 5) 小児科医と母乳育児推進栄養委員会. 新生児委員会による母乳推進プロジェクト報告. 日児誌, 2011; 115 (8): 1363-1389.
- 6) 榊原清則. 経営学入門. 東京: 日本経済新聞社, 2002.
- 7) 河合雅雄. 子どもと自然. 東京: 岩波新書, 1990.
- 8) Margulis L, Sagan D. Microcosmos Fourbillion years of microbial evolution. 田宮信雄訳. ミクロコスモス—生命と進化—. 東京: 東京化学同人, 1989.
- 9) 河合雅雄. 森林がサルを生んだ. 東京: 平凡社, 1979.
- 10) 永井 均. <子ども>のための哲学. 東京: 講談社, 1996.
- 11) 友永雅己. 霊長類における三項関係と心の創発. Japanese Journal of Animal Psychology 2006; 56 (1): 67-78.
- 12) 山極寿一. 家族進化論. 東京: 東京大学出版会, 2012.
- 13) Rizzolatti G, Fadiga L, Gallese V, Fogassi L. Premotor cortex and the recognition of motor actions. Brain Res Cogn Brain Res 1996; 3 (2): 131-141.
- 14) Kurzweil R. The singularity is near: When humans transcend biology. 2005, 井上 健監訳. ポスト・ヒューマン誕生, コンピューターが人類の知性を超えるとき. 東京: NHK 出版, 2010.
- 15) 鷺田清一. 「待つ」ということ. 東京: 角川選書, 2006.
- 16) 中村桂子. “生きている”を見つめ“生きる”を考える. 第15回母乳育児シンポジウム記録集, 2006: 161-174.
- 17) 谷川俊太郎. 谷川俊太郎の問う言葉答える言葉. 東京: イーストプレス, 2012.